



爆乳少女、最後のお遊び

1 プロローグ

「ほら、恥ずかしがらずにさっさと脚開きなさい、みんなもケータ君のおちんちん見たがってるんだから♡」

しらみねせいじ
白峰聖蘭は嘲るような調子でそう言って緑川圭太の両脚を広げた。今にも弾けそうなくらい張り詰めた生殖器が幾人も女子の視線に晒される。

「やだ〜こいつまだなんもされてないのにもう硬くしてるし」



「みんなに見られてるのにビクビクさせて……マジ変態じゃん」

床に敷いたシートに寝かされ、M字に開脚させられた格好で、少年は顔を真っ赤にし、もじもじと身をよじったが、それ以上の抵抗はしなかった。恐怖ですくんでいるわけではない。抵抗を諦めているわけでもない。その未成熟な雄の器官は何かを期待するように上下に打ち震えていた。

「もう待ちきれないみたいだねえ、みんなの前で白いのびゅっぴゅっ出して出すところ想像しちゃってるのかなあ？ くすくす♡」

聖蘭の悪戯な指先が少年の勃起をくすぐるように刺激する。同時にうなじの辺りに柔らかな塊をグイグイ

と押し当てていた。それは当然少女に備わっていないものでありながら、全く異常な代物であった。

聖蘭の上半身に豊かに実ったおっぱいである。それもバストサイズを売り物にしているグラビアアイドルを遥かに上回る、まさに爆乳としか表現しようがない巨大な乳房——着

「くちゅくちゅ、くちゅくちゅ、ってエッチな音出しちゃってやらしいんだあ……んふふ、気持ちいいね〜ケータ君……♡ おちんちん、皮でシコシコ気持ちいいねえ〜……ほら、シコシコ気持ちいいって言ってみて♡ そしたら、もっと気持ちよくなれるよ♡ くすくす」鼻にかかった媚声に耳朶をくすぐられ、理性はますます甘く蕩かされていく。

「あああ……あううう……し、しこしこ、気持ち、いいですうう……」

だらしなく開いた口から勝手に声が漏れ出していた。快楽で半馬鹿になった頭では、それを言うか言うまいか判断することなど不可能で、耳から入った言葉をそのまま垂れ流してしまうのである。

「ふふ、こんな風に、言葉でもおちんちん扱かれるのは気持ちいいんだ、って教えてあげると効果バツグンなんだよ、簡単でしょ？」

聖蘭は胸を揺すって谷間で少年の頭を弄びながら、自信たつぷりに笑ってみせた。

「男子って単純なのね……」

「でも、これなんかすっごいやらしいよ、せーらちゃんの手の動きの感じとか……」

「ほんそれ。見てたらドキドキしてくるよね」

周囲の少女達は目の前の実演に夢中になっていた。頬は赤く上気し、瞳には微かに嗜虐の光が宿っている。自分も男子にやってみたい——言葉にしなくても表情がそう訴えていた。

聖蘭の説明や女子の会話は当然耳に届いていたが、圭太に気にする余裕などない。

頭の中は下半身の快感で一杯だった。ただ指先でつまんで扱っているだけのはずなのに、自分自身でするよりもずっと気持ちがいい——。

それも当たり前のことだった。白峰聖蘭という少女は今まで何人もの男子をこんな風にして手懐けてきたのである。いや、男子だけではない。自分よりずっと年上の男性でさえ、手玉に取ってきた。男である圭太よりも男の性感帯を知り抜いた、いわば魔性の少女にとって、彼を快楽に染め上げるのは造作もないことだった。

ただ、つまんで扱っているだけに見えても、聖蘭の指は裏筋やカリ首を的確に押さえている。爆乳による心地よい圧迫も効いていた。

じつくりと、ねっとりとして、しかし間断なく弄ばれ続けるうちに、腰の甘い疼きは徐々にほつきりとした感覚に変わっていく。突き上げるような射精感へと。

「あああ……あううう……は、はああ、も、もう出ちゃいぞ……」

「ええ？ もう出ちゃうんだ……でもだけど、まだ見せてあげなきゃいけないことがあるから、まだオアズケだよ」

言いながら、聖蘭の手の動きはすでに変化していた。親指と人差し指と中指を、クレーンゲームのアームのような形にして、皮の上から膨らんだ先端部を掴んで、カリカリとひっかくように刺激を与えていく。

「男子がイきたそうにしても、イかせてあげる必要はないんだ。射精の権利は女子が握ってるんだってことを、ちゃんと心と体に覚えさせてあげなきゃいけないの」

可愛らしい指先がペニスの先っぽを執拗に責め立てる。カリ首を何度も擦り、亀頭全体に優しく緩やかなマッサージを加えていく。

「ふあ、あああ……なにこれ……なんか、変な感じ……」
今までに感じたことのない気持ちよさに圭太の腰が勝手にくねる。けれど、その快感はどこか芯が外れていた。今にも射精してしまいそうなくらい肉棒は充血し膨れ上がっているのに、最後の一線が越えられないのである。

「んふふふ、こうやって、おちんちんの先っちょだけ可愛がってあげると、男子って気持ちいいのにイけなくなっちゃうんだよ♡」

楽しそうに解説する聖蘭の腕の中で、圭太は腰をヒクヒクと悶えさせ続ける。身体がいくことを求めて自然とそうなってしまうのである。

その惨めなダンスは、周囲の女子の嘲笑を買った。

「あああ……ひいいい……は、はやく、出させてえ……こんなの、変になるよお……」

恥ずかしさともどかしさに苛まれながら、圭太は喘ぎ喘ぎ何度もお願いしたが、聖蘭はまるで聞こえていないかのように、解説と手の動きを止めなかった。

「皮が剥けてる子には、この刺激じゃ物足りないから、亀頭を磨くみたいに指先ですりすりして上げると効果的なんだよ」

聖蘭の指先が皮の上から亀頭を撫で回す。限界寸前の少年にとってはそんなささやかな刺激さえたまらなかつた。にもかかわらず、やはり放出は訪れなかつた。普段であればもういつているはずなのに、快感は限界を超えているはずなのに、聖蘭の魔法の指技が射精を封じているのである。耐えがたいほどのもどかしさに少年は聖蘭の腕の中でよがりくねった。

「あああ……ひいいい……これ、だめえ……お、おかしくなりそう……」

「あっははは♡ もうおかしくなってるし♡」

「ねえ？ これそんなに辛いのかなあ？」

少年の痴態を少女たちが嘲笑する。中の一人はスマートフォンレンズを向けて、その様子を撮影してさえた。

「うん、男子って射精するの大好きだからね、なんか、聞いたらおしっこを我慢してる時の何倍も辛いんだって♡ さ、ここからが大事なところだよ、みんなちゃんとせーらのやり方見ててね」

少女らに笑顔に向けた唇を意地悪そうに歪め、聖蘭は甘ったるい声で少年に囁きかけた。「ねえ、ケータ君……これさあ……このパンパンになった先っちょ……」

言いながら、念入りに亀頭部を撫でまわしもどかしい快感をさらに刻み付けていく。

「これ、ぐにぐにって揉んで、おちんちん根元から搾り上げてあげたら、どれだけ気持ちいいと思う？」

「あ、あああ……あ、そ、それ……ふあ……」

少年は想像してしまっていた。想像せずにはいられなかつた。その刺激を、麻薬のように依存性のある強烈な快感を。

「このパンパンおちんちんからあ、どびゅどびゅどびゅ……♡　って、白いの吐き出すの……ほら、想像してみてください……おちんちんの奥から、精液昇ってくるところ♡　どびゅどびゅどびゅ……♡　考えただけで、頭のなかでイっちゃいそう……」

聖蘭の甘い声に誘導されて、少年の頭の中は射精一色で染まっていく。

「ね？　せーらの手で、イかせてほしいよね？」

「あ、ああああ……イかせて、ほしい……イかせて、イかせてえ……」

「それじゃあ、ちゃんとおねだりしようね♡　せーら様、射精させてください、ってみんなに聞こえるように。ほら早く。いいなさい」

みんなに、という言葉に周囲の女子の視線を意識した少年は、一瞬言い澁んだ。しかし、それも一瞬だけのことだった。恥ずかしくても素直に従う以外にない。これ以上焦らされたら、ほんとに気が狂いそうだったから。

「せ、せーら様……しや、射精させてください……」

「ダメダメ、そんなちっさい声じゃ……もっと大きい声で」

けれど、聖蘭は完全に屈服している少年をさらに追い詰める。そんな少女の顔には、サデイステイックな愉悦が浮かんでいた。

「ああああ……せーら様あ！　射精……射精させてください……！　出させて、お願いします……射精、せーら様あ……」

圭太は顔を真っ赤にしながら、泣きじゃくるように言った。

「マジで言ったし♡　必死過ぎでしょ」

「でもちよつと可愛いかも、あたしもイジメたいなあ……」

女子から軽蔑と好奇の入り混じった視線を向けられながら、圭太は背筋にゾクゾクと妖しい怖気を感じた。それがどういふことなのか、分からなかった。けれど、恥ずかしいのに、気持ちがいい――。

「はーい、よく言えました♡　ふふふ、それじゃあ、イかせてあげる♡　一瞬で気持ちいいの弾けちゃうから、せーらの手でイカされたってことを、強く意識しながら精液お漏らしするんだよ♡」

聖蘭は満足げに言うのと、屹立を順手で握り込み、根元から亀頭にかけて、中身を搾るように、きゅっ、きゅっ、きゅっ……とリズムカルに扱き上げた。

「はい。射精♡」

「あ、あ、あああああああ……♡」

ボタンを押してみたみたいに、完璧なタイミングで聖蘭の手の中で快感が膨れ、弾けた。

表面張力でコップ一杯に漲った水が、わずかな揺らぎで均衡を失ったように、とっくに許容量を超えていたはずの快感が、最後の一押しで一挙に身体の内側から溢れ出したのである。腰の奥から脳天に向かって絶頂感が突き上げる。背筋が弓なりに反って、頭がさらにおっぱいに埋まった。

脈動と共に噴き上がった白濁液は、予め待ち構えていた聖蘭の掌に受け止められた。

「危ない危ない。そんな風にまき散らしたら女の子様を汚しちゃうからダメだよくすくす♡」

勝ち誇ったように笑い、聖蘭は精液でドロドロになった手を圭太の目の前でひらひらと動かした。まるで、自分の手で搾り出したということを、しっかりと思い知らせるように。

絶頂の余韻に浸りながら、圭太は聖蘭の胸の中で弛緩する。

「気持ちよすぎたからって、いつまでも蕩けちゃだめだよ。ほら、」

聖蘭の言葉に圭太はぼんやりと前を向いた。3人の女子が、好奇心と興奮に瞳を輝かせて、まだ萎えずに硬いままのそれを覗き込んでいた。

「次はこの子らに可愛がってもらうんだから、しゃんとしないとね♡ みんなも、今教えてこと試してみたいでしょ？」

女子達は同時に顔を見合わせ、聖蘭の方を向いてココクと頷いた。そして、爆乳のあわいで弛緩する圭太に三人同時に視線を落とした。緩んだ口元、膨らんだ鼻、悪戯な眼差し。ウズウズ、という擬音を表情にするとしたら、きつと今の少女らの顔に浮かんでいるのと同じくりに違いない。

いまから3人がかりで——そう思うと、不安と期待で圭太の首筋の毛が逆立った。疼きと共に小さく震えた少年の皮冠りの性器に、一人目の少女の手が伸びた。

「さて、次はどうしよっかな」

聖蘭は手の汚れをウェットティッシュで拭いながら教室の様子を眺めた。

放課後の教室のあちこちで、男子イジメが行われていた。

ある男の子は足を椅子に縛り付けられ、後ろ手に拘束された状態で、何人もの女子からまるで玩具のようにペニスを弄られていた。

3人の仲の良い男の子は女子の集団の目の前で、誰が一番早く射精に到達できるかを競わされている。

床の上に転がされ、アイマスクで視界を奪われた一人の男子は、新しいローターやオナホールや、技術が得意な女子が作製した電動式の性具の実験台になっていた。

女装をさせられて、疑似ペニスを装着した幼馴染に肛門を貫かれる男子生徒もいた。

プロレスごっこで完全に首を極められ窒息寸前の状態で太ももコキされる男子、お仕置きと称して電気あんまを30分以上も続けられ泣きながらごめんなさいを繰り返し精液を垂れ流す男子、年上の女の子に可愛らしいパンティを被せられ、後ろから抱きしめられながら両足でペニスを扱かれる男子——行われるすべてを書き出すことは出来ないが、女子達はいじめに自分の好きな方法で男子に性的な虐待を加えているのだった。

それは、世間一般の常識からは考えられないような異様な光景だった。しかし、「女子会」ではそれが当たり前の日常だった。

女子会——といってもメディアで取り上げられるような女の子同士で集まって恋愛の話や仕事の愚痴を言い合う会ではない。男子をイジメ、可愛がり、躰け、弄び、玩具にし、奴

隷にし、ペットにする、そんな女子の集まりが彼女らにとっての女子会だった。といって、そう呼ぶようになったのはメディアの影響も多分にあった。よく耳にする、大人の世界の言葉を自分達の生活や遊びに取り入れる、成長期の習性の一つである。また、実際のな暗号的カムフラージュの役割もあった。日常生活で女子会が、と口にしたところでそれを聞き咎める大人は誰もいない。

始めは男子イジメを発明した聖蘭と親しい友人だけの小さな集まりだった。そのうちに、誘いを受けたクラスの女子が参加し始め、徐々に別のクラスに、そして下の学年にも学年へ広がり、今や上級学年のほぼ全員が女子会に参加していた。

経緯を考慮すれば、自ら進んで参加していない男子の場合、女子会に参加させられた、が正しいだろう。強制的に連れてこられた男子は当然のごとく抵抗する。しかし、少年であるからこそ大切にしてきた男としてのプライドと理性を被虐の快感で溶かされ、敗北と服従の愉悦を教え込まれ、やがては価値観を完全に作り変えられてしまう。

“女の子様”には絶対に逆らってはいけない――

“女の子様”を女神のように崇拜し、奉仕しなければならない――

“女の子様”にしていたくことは、どんなことでも悦びである――

“女の子様”の言うとおりにしている時だけ、男は幸せでいられる――

そんな、女子に都合のいい考えを、無意識レベルにまで刷り込まれてしまうのである。

女子の中には優しさや思いやりや臆病さから、男子にそんなことしたら可哀想だと言ったり、恥ずかしくて出来ないと訴えたりするも少なからずいた。けれど、そういった大人しい女子の価値観もまた、抵抗しながらも被虐の快感に堕ちてゆく男子と同調して変化し、芋虫が蛹の中で溶けて蝶になるが如く、嗜虐的な“女の子様”へと成長を遂げるのであった。

今もこの教室だけでなく、隣接する2つのクラスで同じように男子イジメが行われているのである。学校側に生徒だけの勉強会として、許可を得ての居残りだった。

女子会の言いなりに動く教師は一人や二人ではなかった。女子会に逆らう者は誰もいなかった。存在を知らないうちに、知らないふりを約束させられた教師もいた。とある新任の女の教師は、女子会の一員としてお気に入りの子を可愛がるようになっていた。

白峰聖蘭は女子会――いや、この学校の女王だった。誰も彼女に逆らえなかった。大人の男におねだりすればなんでも簡単に手に入った。それが嬉しかった――と言っても物自体を喜んでいるのではなかった。彼女にとって金銭的な価値は無数に存在する基準の一つに過ぎなかった。それが、持ち主にとつてどれだけ手放したくない物か、手に入れるのに苦労する物か、それがどんな意味を持つのか、真に重要なのだと知っていた。

例えば、大切な人との思い出の品とか、苦労して手に入れたゲームのデータとか、絶対に譲れない勝利とか、愛する人であるとか、個人的な、しかし高い価値があるために絶対に手放したくない物を差し出させるのが快感だった。

あるいは、先生からもらう学校のテストの問題用紙とか、真面目な会社員に万引きさせた商品とか、倫理やルールや法に抵触する贈り物をさせることも快感だった。

相手が自分のためにどれだけのことが出来るのか――。

自分が相手をどれほど深く強烈に支配しているのか――。

そういったことを確認した時に悦びを感じるのであった。

だから、女子会での支配者としての生活は、聖蘭にとって最高のものだった。

けれど、何事にも終わりが来ることを聖蘭は知っている。そんな最高の生活のリミットはあと半年、卒業が待っているから明確だ。卒業すれば、みんなバラバラになってしまう。女子会も続けられるかもしれないが、自然と飽きてしまうかもしれない。そう考えた時、聖蘭は何とも言えない気持ちになるのだった。

「よお。なにぼんやりしてんだよ、せーら様」

擲揄うような調子で声をかけてきたのは、女子会の初期メンバーの一人、はなだゆうり縹悠李だ。体

操着が良く似合う、ショートカットの活発な少女である。その健康的に色づいた瑞々しい肌は、じんわりと汗ばんでいた。大のプロレス好きで、現在は総合格闘技やボクシングに打ち込む彼女は今まで男子を練習台に様々な技を仕掛けていたのだった。

「なんだ、ユーリか。珍しいじゃない、放課後はジムなのに」

「なんだってそれ酷くね？ 今日はお休み、オーバーワークは筋肉に悪影響なの」

それよりもさ。と悠李は聖蘭の爆乳におもむろに手を伸ばして、

「なんかさつきしんみりした顔しちゃってたじゃん、どうかしたの？」

「真顔で何おっぱい揉んでんのよ。ばか。セクハラ」

聖蘭は眉間に皺を寄せて腕を振り払ったが、本気で嫌がっているのではなく、悪戯に呆れた態度だった。

「いや、悪い悪い。聖蘭のおっぱい、あたしのと違って触ると気持ちよくなってさ」

おっぱいというより胸板と言った方が相応しい自分の胸を触って舌を出す、悠李もまるで悪びれた様子はない。同性の友人同士だから許されるスキンシップなのである。聖蘭もそれ以上抗議はせずに、問いかけに答えた。

「別に、どうもしないんだけど、あと半年もすれば卒業なんだっておもったらさあ……」

「おセンチ入っちゃった的な？」

「そんなんじゃないけどお……なんか、卒業ってさ変じゃない？」

「変？」

「今までずっと一緒に過こしてたのに、ハイ卒業ってなったら、その今まであったものが消滅して、二度と元には戻らないんだよ」

悠李は腕を組んで難しそうな表情でうーんと唸った。

「やっぱそれって寂しいってことじゃないの？」

「それは違う気がするんだって。なんと言うか、これで終わっちゃうのがもったいない、みたいなの？」

「終わるとは限らないでしょ」

悠李の代わりに答えたのは、濡羽橘花^{ぬればきつか}だった。彼女も女子会が活動する前からの聖蘭の友達だった。すらりと背の高い、大人びた雰囲気の少女は、腰まである長い黒髪をさらりとかき上げ、眼だけを動かして二人を交互に見た。

「みんなが同じ学校に進むわけじゃないけど、私達一人一人がいなくなるのでないですよ？　今までだって続いて来たんだから、女子会はこれからも続くわ」

表情一つ変えずに、理路整然と述べられた言葉には説得力があったが、聖蘭は直感的にそんなことは無いのだろう、と思った。

「そう簡単ならいいんだけどね……」

離れ離れになるということの影響は、きつと想像以上に大きいだろう。なぜなら、女子会が習慣で無くなってしまふから。習慣で無くなった遊びはそれが好きだと思っても、いつかはやらなくなってしまう。

ゲームだってそうだ。やることが無くなったり、同じことの繰り返しだったりするから、飽きるのでは無い。ふとしたきっかけであるゲームを続けなくなって、別のゲームや別なやりたいことが取って代わった時に、後から振り返って、最初のゲームを飽きたと断定するだけなのである。

本当は、ほとんどの時間退屈していても、それが習慣になってさえいればゲームは続けられる。ゲームだけではない、苦痛を含んだあらゆることを継続出来るのである。それが、習慣の持つ魔力だった。

卒業しても、しばらく女子会は続くだろう。けれど、各々が理由をつけて来なくなりはじめて、やがて緩やかに終わってゆくのだろう。聖蘭にはそれが確実なことと思えた。

「あーあ、ずっと卒業なんてしなかったらいいのになあ……」

そうすれば、いつまでも男子や先生を玩具にする日々が続く。押し車は、中のハムスターが走り続けている限り、いつまでも回り続けるのである。

「そういうわけにはいかないでしょう」

と、橘花がきつぱりと言い切った。冷然とした言い方だが、突き放しているのではなく、普段から感情の起伏に乏しいだけなのである。聖蘭もとくに気にした様子はない。

「分かっているわよ。分かっているから、そうなたらいいのになって」

「つてもさーやっぱそこはどうにもなんないって」

悠李は頭を掻きながら言った。面倒なことはあんまり考えたくないともいうように。

「卒業した後のことは後になって考えたらいいんだよ。それよか、今を愉しもうぜ。ほら、可愛いボクちゃんもお待ちかねみたいだし」

悠李に言われ、後ろを振り向くと、いつからそこにいたのか、くせつ毛の、背の小さい男子が困ったように腕をこまねいて立っていた。黄崎という、一つ下の少年は、甘えん坊で、聖蘭のお気に入りの一人であった。

「あの……せーらお姉ちゃん……」

荒くなった吐息、ドキドキと心音が聞こえてきそうなくらい真っ赤になった頬、ちよっと前かがみになった姿勢と手で隠された股間、さっきから落ち着かなく瞬きを繰り返す眼はちらちらと聖蘭の胸元を盗み見ていた——すぐに聖蘭はある一つの約束を思い出した。けれど、あえてとぼけた調子を繕って、

「あら〜ユーキ君、どうしたの〜？ おねーちゃんに何かご用？」

「あ、その……きよ、今日で、い、一週間……だから……約束の、あの……」

「約束？ なんだったかなあ〜？ おねーちゃん思い出せないから、ユーキ君から言っただけだよなあ」

顎先に指を添えて、大げさに首を傾げ、甘ったるい声でもったいぶる聖蘭に、祐樹の困惑は一層深くなって、悠李は呆れたように肩をすくめた。

「えと、あの……言われた通り、お、オナニーしてない……一週間、我慢……した、から……ば、ば……パイズリ……」

「パイズリ？ ふふふ、それなんだっけ？ むずかしくって、おねえちゃんちよつと思いつけないから何をどうすることか、教えてくれるかなあ♡」

聖蘭にパイズリが分からないはずはない。何度もそれをしてきたし、何度もそれで男を骨抜きにできたのだから。ただ、揶揄って焦らして遊んでいるのである。

それは遊ばれている祐樹も承知していた。だが、それでも素直に言われたとおりにせざるを得ない。そうしなければ、いつまでも気持ちよくしてもらえないと、覚えさせられているから。祐樹は今にも泣きだしそうな声で、

「せ、せーらおねーちゃんのおっぱいで、ぼ、僕のおちんちん挟んで……えと……むにゅむにゅって……」

「ふふふ、おねーちゃんのおっぱいで、おちんちん挟んで……」

聖蘭は眼を糸のように細め、ニマニマと挑発的に笑いながら、服の上から自慢の爆乳を両手で持ち上げて、その行為のあからさまなジェスチャーを加えつつ、少年の言葉を反復する。「むにゅむにゅ……ってして欲しいんだ……爆乳おっぱいお肉でむにゅむにゅ……って皮ごと可愛がって欲しいんだ……♡」

言葉に合わせておっぱいが上下する。まるで、その間に挟んだ何かを押しつぶし、扱き上げるみたいに。量感たっぷりの乳肉が波打つ、服の上からでもわかるその魅惑の揺動から、もう祐樹は目が離せない。艶を帯びた淫らな言葉が妄想と期待を掻き立てる。否応なしに高められる興奮。視覚と聴覚から入ってくる甘い刺激が、理性を蕩かしていく——。

「あ、あああ……せーらおねえちゃん……だめ、おちんちんでちゃ……」

「ふふふ……ほくら、ふるるん♡」

意地悪な笑み。ジップがサツと下ろされた。衣服の下にパンパンに詰まっていた爆乳が弾けるように零れ出た。真っ白い肌、重量感たっぷりの丸みを帯びた塊が二つ、ふくらみの頂点は桜色で、本来なら突出しているはずの乳頭の埋もれているのが見て取れた。サイズは

カップだ。ブラジャーをつけていないのは、特注で作ってもすぐにカップが合わなくなってしまふからだだった。

「あくっ!!」

その魅惑の詰まった豊乳はいわば視覚を通して伝わってくる快感だった。

それを眼にした瞬間、意識をすべて奪われた。その柔らかさを、その温かさを、記憶に刻み付けられたその気持ちよさが、瞬時に思い出された。拍動する心臓のポンプが、血と熱さを一気にくみ上げた。

圭太は下腹部に不随意の収縮を感じた。きゅっと付け根の辺りが締め付けられるような感覚。それが何のきっかけか頭が知覚するよりも早く体が動いていた。

「ああああ……そんな、ダメ……待って、待って……ああ、ああああく……」

内またになって、慌てて股間を手で押さえたが、その情けない漏出は止めようがなかった。足腰が震える。甘い放出感がパンツの内側に広がっていく。それは仕方のない反応だったのかもしれない。祐樹の中で、聖蘭の爆乳と快感とは離れがたく結びついていたし、我慢に我慢を重ね、興奮にはち切れそうな状態の欲望にとって、間近で見る生乳はあまりにも刺激が強すぎたのである。

「あれあれえ？ どうしたのお？」

わざとらしく聖蘭が訊ねる。祐樹は恥ずかしさに顔を真っ赤にして、股間を抑えたまま直後につきまものの脱力に身を任せるようにへなへなと床に膝をついた。

「あううう……」

「あ、も・し・か・し・てえ……せーらお姉ちゃんのおっぱい見ただけで、お漏らししちゃったとか？」

聖蘭は周囲に聞こえるような大きな声で、大げさに驚いてみせた。教室にいた女子達が聖蘭と祐樹に注目する。

「えーうそ、ほんとにおっぱい見ただけでいったの？」

「やばく……それはそーろーすぎっしょ」

好色な視線と揶揄う言葉に晒されながら、祐樹は顔を真っ赤にした。おっぱいを見た途端に射精してしまったのは紛れもない事実だった。恥ずかしさと情けなさと、喪失感と、居たたまれなさで胸がいつぱいだった。

聖蘭は腰をかがめ、うなだれる少年の首に手をまわして頭を掻き抱いた。柔らかな谷間に顔が埋もれる。

「泣かなくなったっていいんだよ？ ちょっとびっくりしちゃっただけだから♡ お姉ちゃんのおっぱいの気持ちよさ、おちんちんが覚えちゃってるから、今から気持ちよくしてもらえるって思ったら、興奮しすぎて我慢できなくなっちゃったんだよね♡ くすくす♡」
微笑しながら、聖蘭は少年の頭を撫でた。

視界一杯に広がったおっぱいから温もりが伝わる。柔らかさが左右から押し寄せて来る。うっとりするような匂いがして、頭がほわほわとしてくる。祐樹はもっと、目の前のお姉ちゃんに惹かれていく。

「あうう……そう、だけど……でも、ごめんなさい……」

「うんうん、謝れて偉いぞ♡ ほら、そんなとこ座り込んでたら汚れちゃうよ？」

手を握って促され、祐樹はゆっくりと立ち上がった。周囲の女子達はまだ笑ったり、何かを囁き合ったりしていたが、祐樹には全く気にならなかった。

「せ、せーらお姉ちゃん……ありがと……」

「うんうん。どういたしまして」

少しの間。言葉の接ぎ穂を探すように左見右見、祐樹は恥ずかしそうに手を揉みながら上目遣いで聖蘭を見た。

「あ……もう、これで……その……ぱ、パイズリ……もう今日は……」

「やくんほんと可愛い……♡ 今お漏らししたばっかりなのに、もう射精することしか頭にないんだ♡」

聖蘭は悪戯っぽい笑みを浮かべ、少年のズボンの膨らみを手でそっと包み込んだ。

「おちんちんも、もうガツチガチになってるし……まあ、一週間も我慢してきてくれたんだし……いいよ。してあげる♡ マジ可愛かったしね♡」

そこに座って、と机に腰かけるよう促したその時だった。聖蘭のスマホに着信があった。担任の黒谷薫からだった。今日は職員会議があると聞いていたはずだ。鬱陶しいから、女子会活動中は連絡を控えるように言っておいたはずなのに。祐樹を待たせてラインのアプリを立ち上げた瞬間、聖蘭の表情が曇った。メッセージはこのようなものだった。

「お忙しいところ失礼いたします。職員会議にて、男子イジメが議題に上がりました。女子会は今も続けられなくなるかもしれません」

2 発覚

渋谷龍馬しやがやまは校長室の黒い革張りの椅子にゆったりと座って、重厚なマホガニー製の机に置きっぱなしにしてあったコーヒーを一気に呷った。酸化したぬるい苦みが口中に広がる。まずさに顔が険しくなる。会議前に淹れたそれは、すっかり冷めていた。

龍馬は9月から新たにこの色彩学園に赴任してきた校長だ。今年で37になる、背の高い、精悍そうな丈夫だった。校長としてはかなり若い。しかし、彼には若さを理由に足を引っ張ろうとする連中を黙らせるだけの実績があった。

かつて教鞭を執っていた学校で生活指導としてリーダーシップを発揮し、深刻な初期の問題を解決した。その評判から、イジメや学力に関する問題を抱えたいくつかの学校に招かれ、短い在任期間のうちに、小さくさまざまな問題を改善し、あるいは解決に導いた、実行力と決断力を持った改革者だった。校長としての経験は今回で3度目だ。何年か前にその手腕をメディアに取りざたされたこともあり、かの有名な明治維新の立役者と名前が同じであることと俳優のようなルックスも手伝って、当時はカリスマ教師、などという本人の望まないレッテルを貼られて持ち上げられた。龍馬自身の見方によれば、学び舎を本来あるべき形に戻しただけ、だった。

色彩学園の他にも龍馬の助力を求める声は多かったが、2学期から突然、この学園へ赴任したのはいくつかの理由があった。第一に、前校長の青柳達夫との縁だ。彼は龍馬の人生において二度、指導者という立場だった。一度は学生として、もう一度は教育実習生として。そんな青柳から去年の暮れに、次の年度から校長をして欲しいと直接オファーがきたのである。

酒の席であった。彼は憔悴した様子だった。アルコールが口を軽くしたのか、現在受け持っている色彩学園では深刻で根深い問題——その具体的な内容は語ってはくれなかったが——を抱えており、自分では手に負えないと漏らし、自分の無力さを嘆いた。そして、龍馬に対して自分に代わり校長を務めてくれないかと、頭を下げたのである。恩師のそんな姿に龍馬は困惑したが、その時に任されていた学校で、やっといじめ問題に解決の兆しが見えた頃であったため、正直に今は引き受けることは出来ないかと一度は断ったのだった。そうして、青柳が定年までまだ三年以上もあることと、指導者としての尊敬を伝えて恩師を元気づけ、その場は済んだのである。

しかし、今年の7月、くも膜下出血により青柳が倒れ、昏睡状態となった。溜まっていた心労が、学期を終えてふっと気の抜けたところにのしかかって来たらしい。そこでもう一度、龍馬のところへ後任の話が持ち掛けられた。病院に搬送される直前に青柳が指名したのだと聞かされた。

その頃には龍馬の方も歪だった学校の体質を改善し、校長としての仕事の大部分を片付けた折であったため、中途半端な時期ではあったが、色彩学園の校長の任を引き受けたのであった。

8月中に引継ぎを終え、新学期から一か月、龍馬は毎朝早くから校門の前に立って挨拶を交わしたり、空いた時間があれば授業の様子を見学したりしながら、生徒の様子を観察した。興信所を開いている知人に依頼して、裏サイトや生徒のSNSの調査も行った。深刻な問題を抱えている、という話を聞いてはいたが、少なくとも表面上、荒れているようには見えなかったからである。学力も県内で上位に入るほど優秀だった。イジメに関しての相談も今年に入ってからは1件も寄せられていなかった。去年、一人自殺者があったが、当時の資料によれば同級生との恋愛問題のこじれと両親との不和が重なったことが原因と結論付けられていた。

だが、イジメというのは根が深いほどに、水面には波を立てないものだ。どこに問題があるか、それを突き止めなければならなかった。

そうして、調査を続けるうちに、新校長は一つの傾向を見出した。上級生の男子生徒が大人数すぎるのである。この年頃の男子は、もつと深渾はつらつとして、時にそれが問題の種になるとさえあるのだが、まるで去勢された犬よろしく、喧嘩の一つもないのである。

訝しんだ龍馬は、教員達に話を聞いてみたが、歯切れの悪いことを答えるばかりで、生徒にそれとなく話しかけてみても、満足な答えは得られなかった。だが、彼の教師としての勘が違和感を訴えていた。

女子会の話を目にしたのはそんな折だった。彼の一人息子である幸喜からだった。

幸喜は学園の最高学年にあたる年で、勉強は出来るが、早生まれで身体が小さく、内気な少年だった。龍馬は2年前に妻と離婚し、父と息子、二人暮らしだった。だが、不平を述べたり、荒んだりせず、家に持ち込んだ仕事を遅くまでこなす父を気遣って夕食を作る孝行息子であった。

その幸喜が夕飯の席で、「学園には慣れたか？」と何気なく聞いた父に対してこう答えたのである。

「あの学校、なんか変だよ」と。

幸喜もまた、龍馬と同じように不可解に感じているらしく、男子が馬鹿なことを全然やらないことや、放課後に多くの生徒が学校に残ることを打ち明けた。そうしてさらに、「女子会」という単語を友人が漏らしたことを口にした。「女子会ってなに？」と聞き返したところ「何でもない」と口を噤んだため、その友達から詳しくは聞けなかったが、その狼狽えようや、普段の女子生徒に対する男子の遠慮した態度を見るに、女子会というグループが男子をイジメているのではないかと言うのである。さらに、昼休みに女子生徒数名が男子を取り囲んでどこかへ連れて行くが何度となくあったことも、それを裏付ける事実だと語った。

龍馬はその話を受け、真偽を確かめるために生徒の何人かに女子会についてそっと尋ねてみた。返ってきた答えは「知らない」だった。だが、そのぎよっと驚いたような反応と逃げるように会話を切り上げようとする態度は、ただ単に知らないのではなく、口止めされていることを物語っていた。

そうして先ほどの定例会議で、職員たちに学校でイジメ問題があるということ、そしてそれに女子会と言うグループが関与していると話した。職員たちはその突然の発表に困惑した様子だった。それは当然の反応だろう。だが、龍馬にも考えがあつたことだった。彼ほどよめく教員に対し、堂々とこの問題に対する方針を発表し、女子会について情報があれば隠さずに報告するように言い伝え、会議を締めくくつたのであつた。

ここからが問題だ。龍馬は目をつむって大きく息を吐いた。

おそらく、今日の会議を受けて教師の何人かが打ち明け話をしてくるだろう。龍馬はそう期待していた。

教師も人間だ。問題解決を願っていても、後ろ盾やきつかけがなければ、それを見て見ぬふりをするということもある。とくにイジメの問題は発覚した時の傷は、秘匿し続けた時よりも確実だ。もちろん大きな悲劇をもたらした場合を除いてだが。時が問題を解決することもあるし、卒業してしまえばその関係は少なくともこの学校からはなくなるのである。そのため、事を大げさにしないように努めるということは、ある意味で自然なことなのである。保身を非難するのは簡単に賢くなった気分になるに浸る優良な方法だが、それを無くすにはインセンティブを与える方が賢明だ。

折から、校長室のドアを誰かがノックした。

身だしなみを整え、椅子に座りなおしてから、彼はどうぞ、と呼びかけた。

「失礼します」

言いながら入ってきたのは、生活指導の黒谷薫くろたにかおるだった。彼は龍馬の大学の後輩で、偶然にも教育実習の折に指導を受け持ったという縁がある。大学時代は水泳で鳴らしたスポーツマンで、正義感が強い一方、柔軟で大らかな思考を持ち、生徒のことを第一に考える姿勢は保護者や同僚からの評価も高い。昨年交通事故で妻を亡くしたと聞いていたが、今ではすっかり立ち直っているらしかった。

「先ほどの件で、お話があるのですが」

薫はジャージの襟を直して静かに言った。

「ふーん……それがほんとなら、確かに面倒なことになりそうね」

白峰聖蘭は自室の大きなベッドの上で、ゲームセンターの景品で取ったクマのぬいぐるみを抱きしめながら、PCに向かってそう言った。ディスプレイでの通話中である。接続しているのは女子会のサーバーだった。文字でのやり取りはラインの方が簡単だが、音声での

複数人の会話はこちらの方が便利なので、女子会ではこのゲーム補助ツールとつかわれる通話アプリを導入していた。

今、通話を繋いでいるのは聖蘭の他に、縹悠李、濡羽橘花、蘇芳絵理と真理……彼女ら初期メンバーは女子会の中で大きな発言力を持つ幹部のような存在だった。その他に灰原菜

という聖蘭らと同学年の女子、1学年下の赤畑真奈美と若苗ヒメ、そして黒谷薫が『会議』と名付けられたチャンネルに入っていた。家族に聞こえると恥ずかしいから声を出せないという理由で、葉だけがマイクミュートの状態だ。

緊急の問題に対応するための会議である。議題はもちろん、夕方に薫が伝えた件だ。他の女子会メンバーを混乱させないため、あの場では女子会を解散し、ネット通信で会議を行うことになったのである。

話はすぐに本題に入って、薫は今日の職員会議で女子会によるイジメが取りざたされたこと、それから白峰聖蘭の名前が挙げられたことを語ったのであった。

「教師は私たちのいいなりか腑抜けばかりだと思っただけ……」

「あの新しい校長でしょ。なんか昔みたことある気がするんだけどな」

「めんどくせーな……どっから漏れたんだ？ そいつシメた方がいんじゃないやね？」

「女子会の内部……男子の嫉、足りなかった」

「どうしたらいいのかな……？ やっぱ、解散ってことに……」

「ヒメやだー。男子イジメたのしーし……」

一部の従順な、あるいは臆病な大人以外には秘密であったはずの女子会のこと表沙汰になった。その衝撃は大きかったらしく、少女らは意見とも、反射的な感想ともつかないことを口々に喋った。

そんな状況を見かねた聖蘭は、ふーつとため息をついてヘッドセットを外すと、あらかじめコピーしておいたコマンドを文字チャットに打ち込んだ。音楽再生ボタンがサーバーに接続され、次の瞬間、手の中のヘッドセットから爆音で音楽が流れだした。

聖蘭はすぐにコマンドを打ち込んで音楽の再生を止めさせ、文字チャットに、

『みんなちよつと静かにしよっか。せーらからまとめて話すから』

と書き込んだ。その一段上には、葉が驚いて指を走らせた際に入力された意味のない文字の後に『鼓膜破れた訴訟も辞さない』と冗談が並んでいた。

『こんどおっぱいしてあげるから許してしおりん♡』

謝罪の言葉を送信すると、聖蘭はヘッドセットを装着しなおした。

「みんな色々意見があるみたいだけど、大事なものはこれからどうするか、だよな？ 女子会って名前まで出ちゃったのは事実だし」

「ったってよお、チクったやつはどうすべよ」

悠李がむっとしたような声で言った。

「チクったやつが居たならね。だけどまだ、どこから漏れたのかわかんないでしょ？　そも、この話変なのよ」

「へん？」

「そういえば……」

「イジメって、“誰がイジメられた”んだろ？」

絵理が呟き、真理が後を継いだ。

「そういうこと。ねえ、せんせー。会議で被害にあった子の名前でした？」

「いや……出ていません」

薫は思い出すように慎重に答えた。教え子の聖蘭相手に尊敬語を使っても、誰も驚く者はいない。それが当たり前のことだからである。聖蘭に言いなりのロボットとして、教師の立場を利用していた。

「全校生徒に発表するならともかく、職員会議では流石に名前ださないとおかしいとおもいうのよねえ」

『それに、女子会って言っても、具体的に名前も挙がってませんよね？』

栞がそうチャットに書き込んだ。女子会がイジメを行っているという事実があるから無視しそうなになっていたが、そのメンバーが誰なのか、実際にいじめを行ったとされているのは誰なのか、それは本来最も重要なはずだ。誰かが答えを言ってくれるのを相互に促すように、しばし沈黙が通話埋めた。

「……だけど、渋谷校長は証拠もなしにモノを言う人物じゃあ——」

「あー思い出した！　カリ……カリ教師？　とかって昔テレビ出てたの見たことあります」
薫の話さえぎって早口でまくしたてたのは真奈美だった。

「なに、マナ、そのカッコカリみたいなの？」

ウケるんだけど、と言ったのはヒメだった。

「カリスマでしょ、芸能人以外で凄い人が出てきたら下らないテレビとか雑誌とかがとりあえずつけるあれ」

聖蘭が答えると、真奈美はそうそれです、と照れたように言った。

『ガイガーカウンターかな？』と栞が書き込んだのに誰も反応しないので絵理が『そのカリカリじゃないから』と返していた。

「実績もあるみたいだし、無意味に騒ぎ立てるための発表じゃないでしょ。証拠を掴んでるって考えた方がいいと思う」

「ああ、そういえば」

薫が先を制するように言った。

「知り合いの探偵に調査を依頼しているみたいですよ」

「探偵とかやべーじゃん！　犯人はお前だーやられちゃうわけ？」

悠李が言うのと、真理が呆れたようにため息を吐いた。

「いや、そんなステレオタイプな探偵とかいないから……」

「探偵って言っても、犯人探しとかじゃなくて浮気調査とか、個人の身元の特定とか、人探しとかしてくれたりするみたい。だよな？　せんせ」

「そうですね。せーら様の言う通り、そういうった調査の代行業ですね。校長の古い友人で、私立で探偵業を営んでいる人がいるそうで、その人に頼んだそうです。名前は……すみません、聞きそびれました」

探偵については後日黒谷が具体的に名前や事務所の場所などを聞き出すという話で話が終わった。他に何か向こうの動向が分かる手立てはあるかという話になったが、誰からもコレという案が出ず、しばし会話が停滞した。

「ゲームに勝つには先手を打つか相手の手を読むのが必要でしょ？」

言い終えてから聖蘭は手元の炭酸水を煽って舌を湿した。

「つたつて、なあ……ここまで大きな問題になったのって初めてだしなあ」

椅子の軋む音。頭を使うのが苦手な悠季が早々に面倒くさくなって、背もたれに寄り掛かったようだった。

『そういえば』

と、チャットに葉が書き込んだ。

『いじめって学校とか自治体で対策マニュアルみたいのあるんだよね？』

「それだ！」

なぜ気づかなかったのか、聖蘭は指を鳴らした。確かに学校ごと、あるいは地域でそういうマニュアルが作られているはずだ。今度葉にはご褒美を上げないと。

「しおりん賢い！　せんせー、そういうの持ってる？」

「……あります。今日の会議で配布されたのでコピーして共有します」

「もーすっかりしてよせんせー、そういうの教えるためにここにいるんでしょ？」

しばらくして、文字チャットに大事そうな部分だけを抜き出した3枚ほどの画像がアップロードされた。メンバーと話しつつ、聖蘭はそのすべてに目を通した。

概ねそのマニュアル通りのことが実行されるとすれば、近いうちに生徒へのアンケートや聞き取り調査が行われるだろう。さらに、見えないところで行われるいじめを見つけるため、ネットの調査も徹底されそうだ。地域住民や保護者と連携し、監視の目を強めるというのも厄介だ。

そこで女子会の首脳陣で30分ほど話し合った結果、3つの方針が採用された。

1 つ目は監視の目に触れやすい場所、特に学校では男子イジメを控えること。

2 つ目はインターネット上に投稿した動画は全て削除し、SNSのアカウントを持っていない人は鍵をかけて身元の不確かなフォローは排除するように徹底すること。

3つ目はアンケートや聞き取り調査の際に聖蘭の名前をいじめの被害者に見せかけ、悠李と橘花の二人を女子会の主要なメンバーとして告発^{チク}することだった。

「ごめんね二人とも。身代わりにしちゃって」

「ま、あたしはワルモノに見られんなア慣れてっかんな。それよか優等生の橘花ちゃんは大丈夫なんすかねえ？」

「私は、気にしないから」

挑発するように言った悠李に橘花はそっけなく答えた。二人は静と動とでもいうような反対の性質を持っていて、しばしば反発することもあるが、聖蘭との付き合いは長く、信頼は厚かった。

被害者として聖蘭を立てたのもより校長に近づき易くするため。イジメられる理由も彼女の身体を見れば十分推測できるし、納得できるものだった。実際にかつてはそれが原因で男子から押揃われたこともあった聖蘭である。

2年前の夏の暑い日、彼女は、放課後の教室で、よくちよっかいをかけてきていた男子に突然押し倒された。誰も助けてくれる人はいなかったし、声もだせなかった。性の目覚めを迎えたばかりの男子にとつて、セックスアピールを凝縮したかのような少女の肉体は、自制を失わせるほどに魅惑的だった。ちよっかいをかけていたのも、恋心や性欲をどう相手にぶつけていいか、分からなかったただけなのだろう。

しかし、衝動に突き動かされた彼の暴走は、最も情けない暴発という形で失敗に終わった。被害者だったはずの少女の驚きと恐怖が怒りに変った。形勢はあつという間に逆転し、少女は生まれて初めて男子を跪かせ、泣かせ、謝らせ、射精させ、征服し、それに伴うゾクゾクするような興奮と快感を知ったのである。

それまでコンプレックスだった、親譲りの奇形的な胸や、豊満な肢体が、男子に対して有効な武器であることを知った。それは少女にとつて奇跡の体験であり、新たな価値観の目覚めでもあった。

——どんな堅物だろうと、大人だろうと、立場があらうと、家族があらうと、男である限りはおっぱいの魅力には絶対に抗えない。それは、聖蘭の経験が証明していた絶対の真理だった。

イジメ被害者として同情を引けば、近づくのは簡単だ。近づいてさえしまえば、後は……。

この1週間、学校側の動きは女子会が予想した通りだった。月曜日には朝の全校集会でいじめ問題についてそれとなく触れ——女子会、という単語は出なかったが——水曜日にはカウンセラーが設置され、生徒が自由な時間に悩みを相談できる窓口が設けられた。そして、金曜日のホームルームでは上級生を対象としたアンケート調査が行われた。

そうしてつい先ほど、終わりの会が始まる前に教室内のスピーカーから、聖蘭に放課後、校長室へ来るようにアナウンスが流れたのだった。

——チョロ過ぎてでしょ。聖蘭は職員室に向かいながら、口の端が吊り上がりそうになるのを抑えなければならなかった。酷いイジメを受けた可哀そうな少女はこんな表情はしない。何度もSOSを出しても、周囲の大人に無視され続けたみたいない硬い表情を取り繕って、新しくやってきた校長先生に向き合わなければ。

聖蘭は「失礼します」と控えめに言っ、職員室に入ると一番近いデスクで仕事をしていた男性教師に放送で呼ばれてきたことを伝え、校長室へ案内させた。

職員室から続く校長室のドアをノックする。

「あの……白峰です」

「ああ。入りなさい」

「失礼します」

聖蘭はまるで初めてであるかのようにおどおどと校長室に入った。室内は二畳ほどの広さで、床には地味な栗色のカーペットが敷いてある。壁際にはガラス扉の本棚が並んでいて、部屋の中は応接スペースとして二人掛けのソファが向かい合っており、その間には木製のテーブルが設えてあった。

部屋の奥の窓の脇にはパキラの鉢植えが飾られ、革張りの座椅子に腰かけた渋谷龍馬が高級そうな机に向かっていた。彼は目を通していた書類を整理して片付けると、入ってきた聖蘭の方を見て、ソファにかけるように促した。ノートパソコンを小脇に抱え、棚の下部にある冷蔵庫を開け、缶入りの烏龍茶を取り出し、机の上に置くと、聖蘭と反対側のソファに腰を下ろした。

「こんなものしかないが、いいかな。白峰さん」

低い声だがよく通るハキハキとした言葉だった。座った時の姿勢もいい。男としても教師としても、相当自信があるのだろう。四角くて綺麗な字を書くんだらうなどと聖蘭は思った。

こういうタイプは、庇護欲を刺激してやればいい。

聖蘭は委縮したように膝の上に手を置いて、キュツと肩を狭めた。肩出しのセーターの内側で、ただでさえ大きなおっぱいが互いを押し合っ、いやらしくニット生地を隆起させる。挟めた襟元から、谷間が零れる。男なら絶対に無視できないと計算された動作だった。

「ありがとうございます……」

自分の胸がどうなっているのか気づかないふりをして、聖蘭は遠慮がちにプルタブを開け、茶色の缶に口をつけて中身を呷ると、小さく息を吐いて、

「えと……それで、その……校長先生、なんのお話なんでしょう？」

どうして自分が呼ばれたか分かっていないように上目遣いでそう訊ねた。

「先日のアンケートと女子会のことについてのことだが」

ほら来た。聖蘭は内心でほくそ笑んで、その話題に触れなくなさそうに困った表情を浮かべ、所在なさそうに左右を見て、生々しく開いた傷口に触れられたようにきつと唇を噛んだ。

「えと……せーら、その話は……だけど、先生になら……大丈夫かな……」

もじもじともったいぶりながら、聖蘭は甘えるような口調で、

「あんね……せーら……アンケートにも書いたけど、クラスの女の子に、ちょっといじわるされてて——」

と、そこで龍馬は手をかざして聖蘭の言葉を遮った。

「まちなさい。君はいじわるされたんじゃないだろう？」

「は……？」

思ってもみなかった言葉に、聖蘭は表情を作るのも忘れていた。

「もっと単刀直入に聞くべきだったな。女子会で一番偉いのは君だろう？ 君たちがやっていることについて、話をしたいんだ。言っている意味はわかるね？」

奥付

- サークル 近未来教養文庫
- 小説 背戸山葵
- イラスト 藤宮やひろ

ご購入&ご読了ありがとうございます。あとがきはテキストファイルで。

注意事項

この物語はフィクションです。

登場する団体及び人物は架空のモノであり、実在のモノとは一切関係ありません。
本作品の無断複写・転載・再配布・WEBへのアップロードを禁じます。

近未来教養文庫